

## 金びか時代の巨富

ヒュー・ロッコフ\* (須藤功 訳\*\*)

### I. 新金びか時代か？

近年、「金びか時代Gilded Age」(1870～1899年)<sup>1)</sup>に注目が集まるようになり、アメリカは「新金びか時代」に突入したというような主張が、ある種の決まり文句のようになっていく。経済学者や歴史家を金びか時代に惹き付けるのは、急激な所得の伸びと不平等の拡大、そして殊の外、富の増大と組合わさっていることにある。この時代は、資本家が「泥棒貴族Robber Barons」<sup>2)</sup>と批評家に呼ばれた時代としても有名である。以来、今なお、経済学者らは泥棒貴族の莫大な蓄財が経済進歩に不可欠の代償であったのかどうかをめぐって論争を続けてい

る。本稿は、金びか時代の巨富の源泉を探ることによってこの問題に新たな光をあてようとするものである。

本稿が主として依拠するのは、1892年と1902年に刊行された2つの長者番付である。これらはフォーブス誌の「アメリカ長者400人」と類似している。後者は、他にも代替的な数量データが数多く利用できるものがあるにもかかわらず、なお富の不平等を調べるために経済学者らに利用されている。というのも、フォーブス誌の番付が富のピラミッドの頂上にいる人々について、独自の情報と巨富の源泉を提供しているためである<sup>3)</sup>。本稿で利用する長者番付は、蓄

\*ヒュー・ロッコフ (Hugh ROCKOFF) : Professor of Economics, Rutgers University, Department of Economics. rockoff@econ.rutgers.edu. *History of the American Economy*, 11th edition, Mason, Ohio, 2009; *Drastic Measures*, New York, 1984; *The Free Banking Era*, New York, 1975.

\*\*須藤功 (Isao SUTO) : 明治大学政治経済学部 (suto@kisc.meiji.ac.jp)

<sup>1)</sup>金びか時代を区切る明確な時期区分はないが、ほとんどの歴史家は1870年代の「どこか」から世紀転換期「あたり」に置いている。

<sup>2)</sup>Matthew Josephson, *The Robber Barons: the Great American Capitalists, 1861-1901*, New York: Harcourt, Brace and Co., 1934が「泥棒貴族」の用語を広めたのだが、しかし、この用語は既に金びか時代に使われている。Frederick C. Clark, "State Railroad Commissions and How They May be Made Effective," *Publications of the American Economic Association*, Vol. 6, No. 6, November 1891, p. 68; Jeremiah W. Jenks, "Capitalistic Monopolies and Their Relation to the State," *Political Science Quarterly*, Vol. 9, No. 3, September 1894, p. 501.

<sup>3)</sup>たとえば、フォーブス誌の番付を利用した最近の研究に以下がある。Marco Cagetti and De Nardi Mariacristina, "Entrepreneurship, Frictions, and Wealth," *Journal of Political Economy*, Vol. 114, No. 5, October 2006, pp. 835-870; Wojciech Kopczuk and Emmanuel Saez, "Top Wealth Shares in the United States, 1916-2000: Evidence From Estate Tax Returns," NBER Working Paper, 10399, 2004; Anders Klevmarken, Joseph P. Lupton, and Frank P. Stafford, "Wealth Dynamics in the 1980s and 1990s: Sweden and the United States," *Journal of Human Resources*, Vol. 38, No. 2, Spring 2003, pp. 322-353; James M. Poterba, "Stock Market Wealth and Consumption," *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 14, No. 2, Spring 2000, pp. 99-118; Leonard Broom and William Shay, "Discontinuities in the Distribution of Great Wealth: Sectoral Forces Old and New," Levy Institute Working Paper, No. 308, 2000; E. Ray Canterbury and Joe E. Nosari, "The Forbes Four Hundred: The Determinants of Super-wealth," *Southern Economic Journal*, Vol. 51, Issue 4, April 1985, pp. 1173-83.

財の代替的源泉が今よりもっと限られていたという理由で、金びか時代にはもっと重要であった。

これらのデータを利用するのは本稿が初めてではない。1907年にアメリカ経済学会がワトキンスの『巨富の増殖』<sup>4)</sup>を刊行したが、これは部分的に同じ番付に依拠している。本稿の主な貢献は経済史家の区分した時代の研究に対するものでも、また新しい枠組みでデータの分析を可能にする経済理論に対するものでもなく、ただ表計算ソフトを使ってデータを仕分けしたことにある。個別の企業家を番付表と擦り合わせ、データの小集団を分析し、巨富の第2、第3の源泉などを調べることは比較的容易なことである。ワトキンスもこうしたことをしたかったのであろうが、当時としては膨大な時間を費やさねばならない作業であったろう。

金びか時代と今日の経済との間には、正確ではないにしても、非常に似通った点がある。金びか時代にも技術進歩は急速であった。おそらく1900年までには（1910年までには確実に）合衆国はイギリスを追い抜き、世界経済の牽引役となった。アメリカの牽引力は、一つには、アメリカ人が一般的に認めている以上に天然資源が国内に賦存していたことにあった<sup>5)</sup>。しかし、それはまた、大量生産技術でこれらの資源を開発したからに他ならなかった。それは肯定的な面ではあるが、われわれがこの時代を見るときにも、現在見ているような否定的な諸側面を見る必要がある。

おそらく、金びか時代と今日とを比較するに際してこの上なく効果的な見解は、クルーグマ

ンによるものであろう。クルーグマンは、今日と金びか時代で所得の不平等の趨勢が類似している点を強調する<sup>6)</sup>。しかし、彼は金びか時代になぜ不平等が拡大したかに関心があるのではなく、現代的な呼称を使うならば、リベラル派はなぜ不平等の拡大を反転させようとする試みに失敗したのかという点に関心がある<sup>7)</sup>。私の理解では、クルーグマンの主張はシンプルで、資本主義的蓄積が進むなかで、政府財政による再分配を欠いたことが不平等を拡大させたと言いたいのであろう。私が金びか時代を検討しようとするのはそれとは違って、不平等の拡大を導いている諸力を明らかにしたいからである。

結論を先取りするならば、金びか時代の巨富の多くは、直接的あるいは間接的に、新しい製造技術が普及した結果であった。しかし、他の諸力、とりわけ金びか時代の投資家や企業家が彼らの巨富を、活況を呈する不動産・金融市場に投資して増やす潜在的な力が働いていたのである。

以下、本稿は第Ⅱ節で、巨富と所得と技術の主な趨勢を探ることによって舞台を設定し、第Ⅲ節では金びか時代の巨富の源泉に関するデータを示す。そして第Ⅳ節では、巨富の創出と拡大に金融と不動産とが果たした役割を細部にわたって検討する。また、第Ⅴ節でボストンとシカゴの巨富の起源について比較・対照する作業を行い、第Ⅵ節では巨富の形成を促したマクロ経済的枠組みの鍵となる要因について議論する。最後に、本稿の主たる成果をまとめることにしたい。

<sup>4)</sup>George P. Watkins, "The Growth of Large Fortunes," *Publications of the American Economic Association*, 3rd Series, Vol. 8, No. 4, November 1907, pp. 1-170.

<sup>5)</sup>Gavin Wright, "The Origins of American Industrial Success, 1879-1940," *American Economic Review*, Vol. 80, No. 4, September 1990, pp. 651-668.

<sup>6)</sup>Paul Krugman, *The Conscience of a Liberal*, New York and London: W. W. Norton and Co., 2007 [『格差はつくられた——保守派がアメリカを支配し続けるための呆れた戦略』三上義一訳, 早川書房, 2008年].

<sup>7)</sup>当時、これらの人々はその主張した政策によってポピュリストあるいは革新主義者と呼ばれた。

## II. 重要な経済的特徴

金ぴか時代には、1人当たり実質GDPは年2.5%と高い成長を達成した(表1)。経済活動全体を測定するやや異なった方法の一つ、1人当たり実質国民所得が何年前にミルトン・フリードマンとアンナ・シュワルツによって編纂された。これによれば、年率1.81%の成長を示している(表1)。しかし、成長率は革新主義時代〔訳注：広くは1890年代～1920年代を指すが、本稿ではより限定的に1900～1915年としている(表1を参照)〕には緩やかであった。1人当たり実質GDPはわずかな年率0.12%、1人当たり実質国民所得は年率0.89%の成長に留まった。比較対照する時期を1920年代まで延ばすと、金ぴか時代とその後の時代の実質GDP成長率をもっと似通ったものになる。ともかくも、金ぴか時代の成長率は、近年に達成された1人当たり実質GDPの1.81%と比べても引けを取らない(表1および図1を参照)。実質賃金の伸びで見ると、金ぴか時代はまたどの時期よりも高かったように見える。不熟練労働者の実質賃金は金ぴか時代には年率で1.43%上昇し、革新主義時代は年0.56%、1990～2006年はわずかに年0.44%の伸びに留まった(表1)。

何が革新主義時代の相対的な成長の減速を説明するのか、また何が現代と金ぴか時代間のギャップを説明するのかは十分に明らかにされてはいない。全要素生産性の伸びの違い〔訳注：技術や文化の違いによる〕、すなわち金ぴか時代の年1.78%、革新主義時代の0.67%、現代の0.71%という成長(表1)の違いは問題を解く鍵の一つであろう。事実、全要素生産性の伸びは実質所得の伸びと常に強い相関を示してはいない。フィールドの研究が示すところでは<sup>8)</sup>、

<sup>8)</sup> Alexander J. Field, "The Most Technologically Progressive Decade of the Century," *American Economic Review*, Vol. 93, No. 4, November 2003, pp. 1399-1413.

アメリカ経済が経験した最大の生産性の急上昇は大恐慌期であった。にもかかわらず、金ぴか時代の相対的に強固な成果を説明する要因の一つは、以下に示すように、技術革新であったろう。

金ぴか時代の経済的側面は現代のそれと非常に頻繁に比較されるのだが、富の不平等が拡大した時代でもあった。金ぴか時代の富の配分の変化については、現代の経済と同じようにはうまく実証できない。というのも、一つはデータを提供してくれる全国レベルの所得税も、またほぼ全期間にわたり遺産税もなかったからである。最良のデータはマサチューセッツのものである<sup>9)</sup>。表2に示すように、このデータで見ると、富の配分は1870年には既にかなり不平等ではあったのだが、最富裕層の保有する富全体の割合は金ぴか時代の間にかなり増加を見ている。1870～1900年の間に、マサチューセッツ州の男性世帯主の上位5%が保有する課税対象の富は57%から70%に上昇し、同様に上位1%が保有する富は27%から37%に上昇した。だが革新主義時代の前半3分の2に相当する1900～1910年には、ほとんど変化はなかった。

最近の推計では<sup>10)</sup>、1916年に上位1%が保有する富の割合は38.12%で、ステッケルらによる1910年のマサチューセッツの推計値35.0%とあまり変わらない——むしろ1900年の方が37.2%と高かった。前者の推計値は大恐慌と第二次世界大戦の時期に急激に低下し、その後は安定状態を保っている。また、おそらくは2000年で終了しているためか、新金ぴか時代への関心から

<sup>9)</sup> Richard H. Steckel and Carolyn M. Moehling, "Rising Inequality: Trends in the Distribution of Wealth in Industrializing New England," *Journal of Economic History*, Vol. 61, No. 1, March 2001, pp. 160-183.

<sup>10)</sup> Wojciech Kopczuk and Emmanuel Saez, "Top Wealth Shares in the United States, 1916-2000: Evidence From Estate Tax Returns," NBER Working Paper 10399, 2004, Table B1.

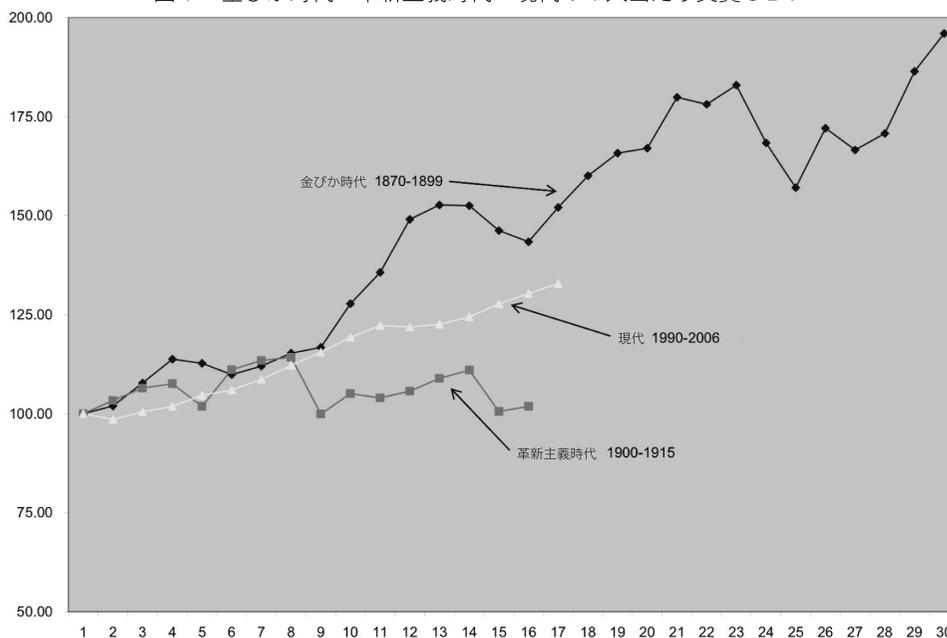
表 1 金ぴか時代・革新主義時代・現代における主要変数の成長率

	成長率（年率％）	金ぴか時代	革新主義時代	現代
		1870－1899年	1900－1915年	1990－2006年
		A	B	C
(1)	実質GDP	4.59	2.00	2.95
(2)	人口	2.09	1.88	1.14
(3)	1人当たり実質GDP	2.50	0.12	1.81
(4)	1人当たり実質国民所得	1.81	0.89	n.a.
(5)	生計費	-1.55	1.20	**2.71
(6)	不熟練労働者の賃金	-0.12	1.76	**3.15
(7)	不熟練労働者の実質賃金	1.43	0.56	**0.44
(8)	総名目証券リターン	7.20	5.07	7.65
(9)	実質名目証券リターン	8.75	3.87	4.94
(10)	民間非農業産出	*5.71	3.54	**3.33
(11)	労働投入	*3.52	2.51	**1.55
(12)	資本投入	*5.18	3.80	**1.77
(13)	全要素生産性	*1.78	0.67	**0.71

注）\* 1874-1899年, \*\* 1990-2005年。

出所）(1)－(3) Johnston and Williamson, “What Was the U.S. GDP Then?” ; (4) Milton Friedman and Anna J. Schwartz, *Monetary Trends in the United States and the United Kingdom, their Relation to Income, Prices, and Interest Rates, 1867-1975*, Chicago: University of Chicago Press, 1982, pp. 122-123; (5)－(7) <http://www.measuringworth.com/>; (8) Standard and Poor’s 500, total return, [www.globalfinancialdata.com](http://www.globalfinancialdata.com); (9)＝(8)－(5); (10)－(13) 全て非農業セクターである。AとB列 John W. Kendrick, *Productivity Trends in the United States*, Princeton: Princeton University Press, 1961, pp. 338-340 [『戦後米国における生産性の趨勢 1948-1969』磯村孝志訳, 白桃書房, 1980年] ; C列 Eric. J. Bartelsman and J. Joseph Beaulieu, “A Consistent Accounting of U.S. Productivity Growth,” in Ernst R. Berndt and Charles R. Hulten ed., *Hard-to-measure Goods and Services: Essays in Honor of Zvi Griliches*, Chicago: University of Chicago Press, 2007, pp. 449-82.

図 1 金ぴか時代・革新主義時代・現代の1人当たり実質GDP



出所）Louis D. Johnston and Samuel H. Williamson, “What Was the U.S. GDP Then?”, 2007. [www.MeasuringWorth.Com](http://www.MeasuringWorth.Com).

表2 マサチューセッツ州における男性家長の課税資産分布

年*	課税資産保有者の割合		
	上位20%	上位5%	上位1%
1820	72.0	40.5	20.3
1830	77.6	49.2	28.9
1840	78.3	45.0	20.0
1850	85.8	55.7	33.4
1860	88.1	55.7	27.0
1870	90.1	56.7	27.2
1880	93.7	60.3	29.1
1900	97.3	70.5	37.2
1910	98.3	68.7	35.0

注) \*1921年の商務省ビル火災により1890年センサス・データの大部分が消失したため、1890年については欠落している。  
出所) Susan B. Carter et al. ed., *Historical Statistics of the United States: Earliest Times to the Present, Millennial Edition*, Cambridge & New York: Cambridge University Press, 2006, Series Be47-Be49.

予想される、上位階層の保有する割合は急速な上昇を示していない。

経済成長の点から金びか時代の好調（頻繁に金融危機が発生してはいるのだが）を説明するため、技術の変化を調べることは当然のことである。金びか時代の技術進歩の何よりも重要な源泉は、「流れ作業生産」の普及であった。この着想は、金びか時代の技術変化に関する歴史研究の第一人者アルフレッド・チャンドラーによって提起され、発展してきた<sup>11)</sup>。流れ作業生産とは最終製品を一固まりごとに生産するのではなく、工場を巧く配置して、原材料が連続的に機械へと流れて、最終製品に仕上げる方法である。

金びか時代はこの新しい産業パラダイムが急速に普及したことから、しばしば「第二次産業革命」とも呼ばれる。「第一次産業革命」は工場制度にもとづいていた。多数の労働者が一つの建物に集められ、労働者はそれぞれ専門化を

通じてその生産性を高めた（アダム・スミスのピン工場）。だが、材料は初期の工場では断続的に移動した。たいてい、労働者は原材料や半製品をあちこちへと運んだ。第二次産業革命では、材料はコンベア・ベルトの上やパイプの中を通して、工場内を絶え間なく移動したのである。

いくつかの事例を取り上げてこのアイデアを説明し、この革新がいかに広く普及したかを示すことにしよう。タバコ産業では、機械が連続的に原料のタバコとロール紙を最終の紙巻きタバコに変え、労働者が各々作業台の前に座って葉巻を1本ずつ巻いていた葉巻産業を追い越した。巨大なシカゴの精肉業者は、連続的に移動する組み立て（解体？）ラインの上で処理肉を生産して、地方の肉屋や食肉処理場を駆逐した。シカゴは「世界の豚屠殺場」になったと、詩人カール・サンドバーグは記している。シンシナティでは、ドヴ・マニシュウィッツがリトアニアから移住して間もなく、何千年ものあいだ手作りして焼いてきたマツァ（Matzo, ユダヤ人が過越の祭りで食べる種なしパン）の製造に機械を導入した<sup>12)</sup>。たぶんもっとも重要と思われる

<sup>11)</sup> Alfred D. Chandler, Jr., *The Visible Hand: The Managerial Revolution in American Business*, Cambridge, Mass.: Belknap Press, 1977 [『経営者の時代——アメリカ産業における近代企業の成立』鳥羽欽一郎・小林製裳治訳, 東洋経済新報社, 1979年]; do, *Scale and Scope: The Dynamics of Industrial Capitalism*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1994 [『スケール・アンド・スコープ——経営力発展の国際比較』安部悦生ほか訳, 有斐閣, 1996年].

<sup>12)</sup> Laura M. Alpern, *Manischewitz: The Matzo Family, the Making of an American Jewish Icon*, Jersey City, New Jersey: KTAV Publishing House, 2008.

るヘンリー・フォードは、もっとも有名なT型車の生産を、1908年に高速移動の組み立てラインで開始した。

結局のところ、電気が大量生産にとって重要になったのだが、その技術が発展し、普及するには時間がかかった。1920年代になってようやく、電化とフォードの生産ラインの革新が生産性に重要なインパクトをもつようになったのである<sup>13)</sup>。加えて、チャンドラーが強調したように、この新技術の普及には垂直的統合が不可欠な部分であった。高速処理には、生産用機械は決して休止状態にならないよう原材料供給を注意深く管理することが必要で、また完成品の売れ残りが積み上げられないように産出量を慎重に管理しなければならなかった。タバコ機械をタバコで満たしておくために、ジェームス・デュークは伝統的なタバコ卸売競争を無視し、農家と直接契約しなければならなかった。さらに、タバコを全国的な規模でブランド化し、広告を打ち、流通させることになった。シカゴの精肉業者らは食肉処理場に家畜を供給し続けるため、シカゴの巨大な家畜飼育場に依存し、また特注の貨車を使った冷蔵肉の全国的流通ネットワークを開発しなければならなかったのである。

そうであるとすれば、われわれの課題は、金ぴか時代の富の増大と驚くべきペースで進む産業革新との間に何があったのかということになる。

### Ⅲ. 金ぴか時代における巨富の源泉

デスラーの研究は「泥棒貴族」に関する一番バランスのとれた、何よりも包括的な研究の一

つである<sup>14)</sup>。デスラーは、もっとも著名な泥棒貴族43名について検証している。内3人、サイラス・マコーミック（農機具）、ヘンリー・ロジャー（石油）、ジョージ・ブルマン（鉄道寝台車）は純粋に革新的であったと認めている。6人については、「産業と鉄道業の技術と行程を改善した」と見なしている。すなわち、ジェームス・デューク（タバコ）、ベンジャミン・ハッチソン（精肉）、フィリップ・アーマー（精肉）、チャールズ・ピルスバリー（製粉）、コーネリアス・バンダービルト2世（鉄道）、そしてアンドリュー・カーネギー（鉄鋼）である。その他の人々はビジネス・モデルや広告、金融の分野で革新を行った。デスラーは泥棒貴族の支持者からはほど遠いが、調査した泥棒貴族内の38名、88%が「革新的」とであると認定することに貢献した<sup>15)</sup>。

われわれはデスラーよりも進めて、1892年の「ニューヨーク・トリビューン」と1902年の「ワールド・アルマナック」で公表され、見事に文書化された百万長者リストと彼らの富の源泉を調査することで、百万長者（富豪）といわゆる億万長者（大富豪）を検討する。ラトナーは1953年に、これらのリストを詳細な序文とともに完全に再現している<sup>16)</sup>。富の不平等拡大についての、また高率関税や寿命の長い特許が不平等の拡大に貢献しているかどうかについての国民の関心が、このリスト作成を動機づけるものであった。どうやら、これらの出版物はその地方の富豪を取材した地方特派員を調査したものである。トリビューンのリストは格別に包括

<sup>14)</sup>Chester M. Destler, "Entrepreneurial Leadership among the 'Robber Barons': A Trial Balance," *Journal of Economic History*, Vol. 6, Supplement: The Tasks of Economic History, May 1946, pp. 28-49.

<sup>15)</sup>デスラーはグラスの半分（約12%）が空、つまり5人はまったく革新的ではないと見ている。

<sup>16)</sup>Sidney Ratner, *New Light on the History of Great American Fortunes: American Millionaires of 1892 and 1902*, New York: A. M. Kelley, 1953.

的であったように見える。リストの編纂者の間違った箇所が多々あるとはいえ、研究者らは一様にリストを作成した労力とその正確さに感服している。

当時の百万ドルの資産は、現在の価値とはかけ離れている。消費者物価指数をインフレタ（価格指数）として使えば、1892年の100万ドルは今日（2007年）の2,350万ドルの価値に近い。これら諸個人の富の平均は300万ドルだから、今日のお金で7,050万ドルの富をもつ人々を見なすことができる。あるいは、年収100万ドルを越す人々に該当する。1人当たり名目GDPをインフレタとして使うならば（同類者と比べてどの位置に立つかを見るため）、1892年の100万ドルは今日（2007年）の1億8,220万ドルに等しく、リストの平均的「百万長者」は5億ドルを上回っている<sup>17)</sup>。

トリビューンは個々の富豪を名前と居住地ごとにリストアップし、その富をどのように創りだしたかを簡潔に記述している。例えば、オハイオ州デイトンの富豪ジョン・ストッタードについての記載では、簡潔に「農機具の製造で身を立て、特許に守られた」<sup>18)</sup>とある。オハイオ州シンシナティのJ.C.タリスは、「大部分は反発ボールの製造で、一部は戦時期（おそらく南北戦争）の住宅投機と不動産投資」で巨富を成した<sup>19)</sup>。ロックフェラーですら、たった3行で評価された。すなわち、「富の大部分は合衆国でのスタンダード石油とスタンダード石油トラストの経営で成した。彼はトラストの社長であったが、近年トラストは解体された。その莫大な利潤は最大の稼ぎ頭である証券に投じられ、有

力で有益な事業をいろいろと展開している」<sup>20)</sup>。最後の記載が明示するように、このリストの最大の弱点は量の記述がないことである。実際、富豪の順位さえも欠く。2番目の潜在的な弱点は、トリビューンの特派員が純資産と総資産を分離しようとしていることである。この点は巨額の、しかし、レバレッジの高い富の蓄積を可能にする不動産の場合はとくに重要であった。

1902年にニューヨーク「ワールド・アルマナック」に公表されたリストは、富豪の数も少なく、記述部分も少ない。タリスはこのリストには含まれていない。ストッタードはただ製造業者とだけ記載され、ロックフェラーも簡単に（たぶん十分であろうが）「スタンダード石油」とリストアップされているにすぎない。1890年恐慌が富豪のカテゴリーから一部の人々を追い出したため、いくぶん「ワールド・アルマナック」のリストは少なく、また完成度でも劣っている。

表3は、「トリビューン」のリストをもとに作成したもので、4,050人の富豪がどのように富を成したかが示されている。これはアメリカの全家計の上位0.03%に相当する<sup>21)</sup>、非常に厳選された集団である。ここでは、新しい産業分類（北米産業分類NAICS）を使って再分類している。

製造業は富豪の第1位の出自で、1892年には全体の25%を構成している。このリストには例の「容疑者」らが含まれている。デューク「タバコ製造業者、アメリカン・タバコ会社社長」、アーマー「卸売り糧食販売及び委託業務、精肉業と投機で、他の企業仲間とともに巨富を成す」。新しい流れ作業生産の採用によって、最終的に巨富を蓄積する人々の一部は、この時点ではま

<sup>17)</sup> Samuel H. Williamson, "Five Ways to Compute the Relative Value of a U.S. Dollar Amount, 1790-2006," MeasuringWorth.Com, 2007.

<sup>18)</sup> Ratner, *Great American Fortunes*, p. 43.

<sup>19)</sup> トリビューンの主な関心は、関税で保護された産業で富を成したのかどうかにあるため、他の源泉とは系統的に区別された。

<sup>20)</sup> Ratner, *Great American Fortunes*, p. 77.

<sup>21)</sup> *Historical Statistics of the United States: Earliest Times to the Present*, Millennial ed., Susan B. Carter et al. ed., Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2006, series Ae79.

表3 1892年の富豪分布（富の主源泉）

産業分類	合計	%	地域0	地域1	地域2	地域3	地域4	地域5	地域6
製造	996	24.6	142	164	324	38	302	4	22
相続	807	19.9	402	80	220	18	68	0	19
卸売	474	11.7	148	46	105	40	111	3	21
金融・保険	356	8.8	112	23	82	28	72	16	23
不動産・レンタル・リース	355	8.8	50	41	51	28	120	18	47
小売	353	8.7	103	51	54	19	83	10	33
輸送・倉庫	208	5.1	53	23	53	7	50	5	17
鉱業	147	3.6	11	3	42	5	26	15	45
建設	80	2.0	18	3	24	2	27	4	2
農業	69	1.7	9	5	1	18	14	7	15
専門職・科学・技術	66	1.6	18	6	13	4	18	2	5
情報	53	1.3	17	5	14	1	15	0	1
公益事業	27	0.7	5	2	11	0	7	0	2
該当なし	22	0.5	6	4	8	1	1	2	0
宿泊・外食	20	0.5	5	3	4	2	3	0	3
芸術・娯楽	7	0.2	1	3	1	2	0	0	0
健康・社会支援	5	0.1	1	0	2	0	2	0	0
その他サービス	2	0.0	0	0	0	0	2	0	0
行政	2	0.0	1	0	1	0	0	0	0
企業経営	1	0.0	0	0	1	0	0	0	0
合計	4,050	100.0	1,102	462	1,011	213	921	86	255

注) 地域0 (ニューヨーク市), 地域1 (メイン, バーモント, ニューハンプシャー, マサチューセッツ, コネチカット, ロードアイランド), 地域2 (ニューヨーク [ニューヨーク市を除く], ニュージャージー, ペンシルバニア, デラウエア, メリーランド, ワシントンD.C.), 地域3 (バージニア, ウェスト・バージニア, ノース・カロライナ, サウス・カロライナ, ジョージア, フロリダ, アラバマ, ミシシッピ, ルイジアナ, テキサス, アーカンソー, ケンタッキー, テネシー), 地域4 (オハイオ, インディアナ, イリノイ, ミシガン, ウィスコンシン, ミネソタ, アイオワ, ミズーリ), 地域5 (ノース・ダコタ, サウス・ダコタ, ネブラスカ, カンザス, モンタナ, ワイオミング, コロラド, ニューメキシコ, オクラホマ), 地域6 (ワシントン, オレゴン, カリフォルニア, アイダホ, ユタ, ネバダ, アリゾナ) の各州。

出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 5-85.

だ巨富を形成していないため、このリストには入っていない。ミルトン・ハーシーは、まだペンシルバニア州ランカスターでキャラメルを作っていた。ヘンリー・フォードはまだ、自動車の大量生産を始めていなかったのである。

ディロンは「億万長者」と呼ばれる人々、つまり1人当たりGDPの約2万倍の富を保有する人々を分析している<sup>22)</sup>。ディロンによれば、この区分は鉄道を建設したり鉄道建設に融資した企業家のほとんどを切り離している。鉄

道は今日のインターネットであった——電子ビームではなく鋼鉄のレールで全国を結んだ。さらに、鉄道は新しい技術と密接に結びつけられていた。輸送費の低下は市場を統合し、新しい流れ作業生産による大量生産を可能にした。ロッキフェラーは少なくとも、もっと効率的なパイプラインに移行するまでは、石油を精油所に運ぶために鉄道を必要とした。また、シカゴの精肉業者らは新鮮な冷蔵牛肉を配送する鉄道を必要としたのである。

われわれの表は億万長者の基準を切り下げて、企業家の富を平均で1人当たり名目GDPの約12,000倍とした。これらの富の多くは間接的に、新技術に結びついている。製造業と相続（約20

<sup>22)</sup>J. Bradford DeLong, "Robber Barons," 1998, Available at [http://econ161.berkeley.edu/Econ\\_Articles/carnegie/DeLong\\_Moscow\\_paper2.html](http://econ161.berkeley.edu/Econ_Articles/carnegie/DeLong_Moscow_paper2.html). (Accessed October 1, 2007).

表4 1892年の富豪分布 (富の2次源泉)

産業分類	2	3	4	5	6
金融・保険	727	410	144	31	14
不動産・レンタル・リース	644	291	72	23	4
製造	348	108	34	11	2
輸送・倉庫	277	158	58	20	6
小売	179	31	4	3	0
卸売	168	32	5	0	0
鉱業	70	28	10	2	3
建設	47	15	12	1	0
農業	46	17	11	1	0
相続	29	20	8	0	0
専門職・科学・技術	28	10	5	0	0
公益事業	24	19	13	9	0
情報	16	8	1	1	0
宿泊・外食	12	5	5	2	0
芸術・娯楽	2	3	0	0	0
企業経営	2	0	0	0	0
その他サービス	2	0	0	0	0
行政	1	0	0	0	0
健康・社会支援	1	0	0	0	0
該当なし	1,427	2,895	3,668	3,946	4,021
合計	4,050	4,050	4,050	4,050	4,050

出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 5-85.

%)に次ぐ最大のカテゴリーは卸売業で、全体の12%を占めた。金融と不動産がそのすぐ後に続き、それぞれ全億万長者の9%を構成した。

表3のもう一つの特徴は巨富と新技術の密接な関係が描かれていることで、億万長者の誕生には農業の役割は小さかった。このことは、とくに農業の重要性が期待されていた南部(地域3)で著しい。だが、南部ですら18人の億万長者を輩出した農業は38人の億万長者を輩出した製造業よりも重要性が低かった。南部の18人の億万長者のうちで「トリビューン」が明示的に、偉大な南部の主要作物が生み出したとしているのはわずか10人にすぎない。すなわち、綿花が4人、砂糖が3人、そしてタバコが3人であった。

「トリビューン」はまた、巨富の二次的な源泉もリストアップしている。例えば、ある企業家は製造業から出発し、それから金融や不動産へと展開した。また、ある企業家は卸売業から出発して製造業へと反対方向に進んだ。一つの

事例が「トリビューン」のデータの性格を明示しているように思われる。カリフォルニア州オーランドのJ.C.エインズワースは、「トリビューン」によれば、その富を「R.R.トムソンとS.G.リードとのパートナーシップによるコロンビア川とウィラメット川の蒸気船、オレゴン州ポートランド及びワシントン州での不動産、銀行業で成した」。したがって、われわれはエインズワースの主たる富の源泉を輸送業、第2の源泉を不動産、第3の源泉を金融に分類した。「トリビューン」のリストを議論し、追加情報のある個人についての記載を読み解くことによって、これが意図的な説明であることが明らかになる。ワトキンスは、おそらくコンピュータの登場前にはこうしたデータの分類方法が膨大な時間を費やす作業であったことから、データのこの面を利用しなかったのであろう。

表4は、このデータを富の2次源泉以降の各々について、人数の多い順に並べ替えたものであ

表5 1902年の富豪分布（富の源泉）

産業分類	合計	地域0	地域1	地域2	地域3	地域4	地域5	地域6
投資家	840	116	186	216	42	199	36	45
製造	730	67	137	199	46	261	8	12
不動産	679	106	115	202	27	190	10	29
金融・保険	353	114	34	58	19	78	26	24
小売	184	64	25	34	5	38	8	10
該当なし	142	15	40	49	1	30	1	6
企業経営	139	60	14	34	3	21	2	5
相続	98	34	15	39	2	5	0	3
鉱業	85	4	2	34	2	13	10	20
輸送・倉庫	69	7	8	18	5	24	0	7
卸売	73	21	3	15	7	25	0	2
専門職・科学・技術	44	23	6	7	1	5	2	0
農業	39	0	1	3	5	15	10	5
情報	30	4	5	11	2	7	0	1
行政	27	2	7	4	2	6	2	4
建設	8	1	0	4	1	2	0	0
宿泊・外食	10	3	2	3	0	2	0	0
公益事業	8	0	2	4	0	2	0	0
健康・社会支援	3	0	3	0	0	0	0	0
芸術・娯楽	3	0	1	0	0	1	0	1
合計	3,564	641	606	934	170	924	115	174

注) 表3の注を参照。

出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 95-106.

る。例えば、富の第2の源泉（2と表記された列）には2,623人（4,050-1,427）が入る。その内723人（28%）が金融への投資で富を拡大し、約52%が金融および不動産投資で富を増やした。富の第3の源泉には155人の富豪がリストアップされている（第3列）。410人中35%が金融投資で、約61%が金融および不動産投資で富を拡大した。その他の富の源泉も重要ではあるが、金融および不動産投資こそが、金ぴか時代の資本家が途中でその富を他のセクターに投下して拡大する主要な方法であったことは明らかである。

表5は、1902年の「ワールド・アルマナック」にもとづいて作成したものである。この情報は、「トリビューン」のリストほど有益ではない。多くの財産が「未確定」と記述され、また非常に頻繁に、われわれには役に立たない「投資家」との記載がある。さらに、このリストは富の追

加的な源泉を記載していない。しかし、表5は全体的には、表3および表4から導きだされる金ぴか時代の富豪のイメージを補強してくれる。その上、製造業は（投資家に次ぐ）主要カテゴリーで、富豪全体の27%をなしている。もし役に立たない投資家のカテゴリーを取り除けば28%になり、1892年に関してわれわれが導き出した数字にやや似ている。これらの巨富の一部は伝統的産業で創りだされたものであるが、「アルマナック」の解釈では、その多くは精肉業のスィフトやアーマー、醸造業のアドルフ・ブッシュのように、新しい大量生産技術を採用した結果であった。

1902年のリストは、1892年のリストと同じように不動産と金融の重要性を示している。1902年までに不動産と金融は製造業に次ぐ位置まで上昇した。実際、不動産と金融による大富豪の数は製造業の90%強ほどになり、不動産と金融

表6 富豪分布の変化 (1892年・1902年)

産業分類	1892年	脱落者	追加者	1902年	一致者
製造	959	-531	400	828	428
不動産・レンタル・リース	473	-18	254	709	455
投資家	0	0	503	503	0
金融・保険	347	-131	170	386	216
相続	775	-582	23	216	193
小売業	340	-219	89	210	121
該当なし	22	-9	130	143	13
卸売	464	-387	28	105	77
輸送・倉庫	207	-140	36	103	67
鉱業	139	-91	49	97	48
専門職・科学・技術	64	-32	25	57	32
企業経営	1	0	54	55	1
農業	69	-45	23	47	24
情報	52	-36	15	31	16
行政	20	-9	16	27	11
建設	78	-66	4	16	12
公益事業	26	-19	6	13	7
宿泊・外食	18	-7	0	11	11
健康・社会支援	5	-4	3	4	1
芸術・娯楽	7	-6	2	3	1
管理支援・廃棄物管理・修復サービス	0	0	0	0	0
教育	0	0	0	0	0
その他	0	-2	0	0	0
合計	4,050	-2,316	1,830	3,564	1,734

注) 各カテゴリーは1902年の重要性に従って分類されている。各カテゴリーについて、1902年の人数は=1892年の数値-脱落者数+追加者数である。追加者数+一致者数=1902年の人数となる。  
出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 5-85, 95-106.

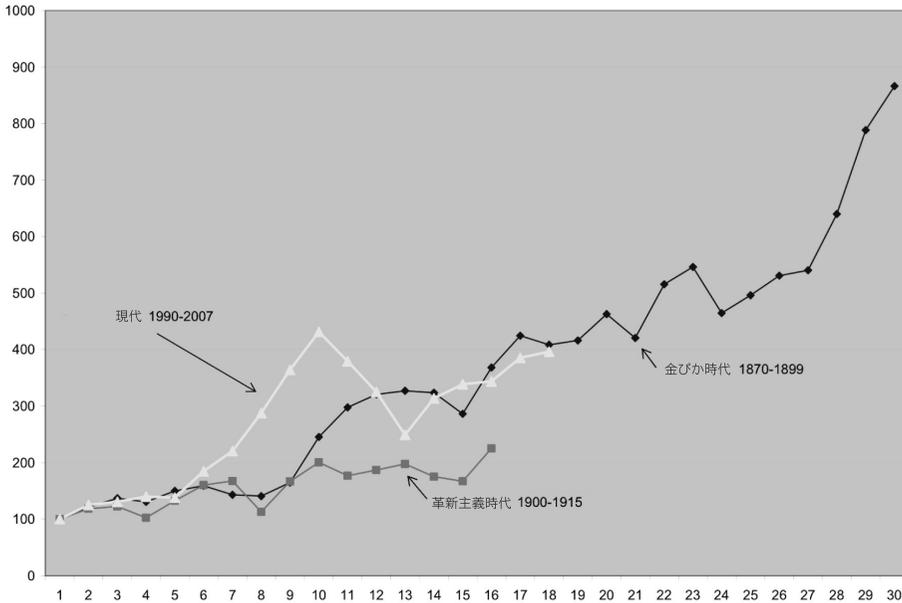
を合わせた大富豪の数はかなりの差をつけて製造業を上回った。

19世紀中でも最悪の不況の一つが1890年代に発生した。1893年には激しい金融恐慌があり、1893年1月から1894年6月までの急激なリセッションから短期間回復した後、1895年12月から1897年6月までもう一つのリセッションが襲った。わが大富豪たちはどのようにやり過ごしたのであろうか。われわれのデータは印象的情報源からのデータゆえに、ぴったりしたものではない。しかし、2つのデータ・リストとの間で1,734人について摺り合せることができた。1902年のリストで消えている人数は、富の逆流を経験したのであろう。表6は、脱落者、新規に掲載された追加者、(両リストの)一致掲載

者について纏めたものである。この度も、コンピュータ登場以前にはこうした作業の手間が膨大であったためであろうか、ワトキンスはこの問題を追跡することはなかった。

表6で何よりも驚くべき特徴は、不動産および金融カテゴリーの回復力である。もっとも持久力があるものとして製造業を、逆にもっとも持久力のないものとして不動産および金融への投機家を期待していた。しかし、こうしたケースにはならなかった。不動産と金融は脱落率が一番低い部類に入り、製造業はその真ん中あたりにある。実のところ、不動産は大きなカテゴリーの中では最低の脱落率であった。1892年の不動産による富豪473人のうち、1902年にはまだ455人(96%)が残っていたのである。

図2 金ぴか時代・革新主義時代・現代の証券市場における実質総リターン



出所) "S&P 500 Total Return Index," WWW.Globalfinancialdata.com.

#### IV. 金融と不動産

どうやら何よりも驚くべきリストの特徴は、非常に多くの富豪が金融や不動産市場への投資を通じて巨富を形成、あるいは増加させたということである。その上、1892年にリストアップされた金融および不動産による富豪の多くが1893年の金融恐慌と1890年代の不況を生き延びたのである。

金融市場の重要性について、その理由の一つを立証することは容易である。図2は、金ぴか時代、革新主義時代、そして当代における総収益率（キャピタルゲインに再投資による配当を加えたもの）の指数を示している。金ぴか時代には1990年代後半ほど大きな好景気は経験しなかったが、長期的には類似した高リターンをもたらした。金ぴか時代初期の証券市場への投資は、この時代の末までの間に9倍に増加した。これは平均である。先見の明があり、リスクを好み、幸運な投資家はかなり成功したであろう。対照的に、革新主義時代のリターンは月並みなものであった。

管見の限りでは、不動産に関する全国統計や地区統計はない。しかし、シラーが1880年代のカリフォルニアの不動産ブームを検討しており<sup>23)</sup>、シカゴに関する資料がいくつかある。ホイットの「シカゴ不動産史」は不動産投資がなぜ起こり、なぜこれほどの巨富を付け加えたのかを説明している<sup>24)</sup>。1873年から1891年の間に、シカゴ全体の土地価格は5億7,500万ドルから15億ドルに、年率5.33%で上昇した。ビジネスの中心地区では間口1フィート当たりで1877年の1,000ドルから1891~1892年の4,000ドルへと、年率9.24%で上昇した<sup>25)</sup>。この期間には物価も下落しているので、実質収益率はさらに1~1.5%高かったのである<sup>26)</sup>。

<sup>23)</sup> Robert J. Shiller, "Historic Turning Points in Real Estate: Presidential Address," *Eastern Economic Journal*, Vol. 34, No.1, Winter 2008, pp. 1-13.

<sup>24)</sup> Homer Hoyt, "One Hundred Years of Land Values in Chicago," Ph.D. diss., University of Chicago, 1933.

<sup>25)</sup> Hoyt, "One Hundred Years," pp. 184-185.

<sup>26)</sup> 以下を参照。Lawrence H. Officer, "The Annual Consumer Price Index for the United States, 1774-2007," 2008, www.MeasuringWorth.com.

その上、精通した観察者の脳裏に不動産および金融のハイリターンがあったことは疑うべくもない。「金ぴか時代」の用語は、通常は1873年に出版されたマーク・トウェインとチャールズ・ウォーナーの同名の小説に遡ることができる<sup>27)</sup>。「金ぴか時代」の用語が直ちに工業化を思い起こさせるにしても、小説自体は専ら不動産を扱っており、不動産投機で金持ちになろうとする——世代や社会層を貫く——欲望を風刺しているのである。

不動産投機を専門的に検討した著者の1人、ヘンリー・ジョージはラディカルな改革家で社会批評家であるが、彼は全ての税金を土地課税ひとつに置き換えることを称賛した。ジョージは代表作の『進歩と貧困』を1879年に発表した<sup>28)</sup>。彼はサンフランシスコで仕事を始めているので、この地の巨富の源泉を調べるのは興味深いことである。サンフランシスコには1892年に156人の富豪がいた。予想通り、もっとも重要な源泉は33人の鉱業であった。小売業が第2位の23名、不動産が3位で18名であった。確かに鉱業と不動産は、経済成長が最初に「土地」の所有権を設定した人々に報酬を与える傾向にある、とのジョージの考えに一致する。だが、ジョージは自分の生きた時代と場所の実相に反応していたのだから、われわれは彼の政策提言に賛成する必要はない。

19世紀末アメリカきっての著名なラディカル・エコノミスト、ソースタイン・ヴェブレンを何よりも悩ませたのは、不動産ではなく金融であっ

た。その古典『有閑階級の理論』(1899年)でヴェブレンは、「顕示的消費」なる用語を新たに付け加える中で、富を支配する人々のあからさまな支出癖を批判した。『企業の理論』(1904年)では、富を蓄積した人々の経済的貢献を退けた。というのも、彼らは18世紀の海賊や古代ヴァイキングの侵略者に類似し、横取りで巨富を手に入れ、生産には何ら貢献していないからであった。1908年に、一流の雑誌に発表した論文「資本の性質について——投資、無形資産、金銭上の大立て者」では、ひとつのメッセージを強調した<sup>29)</sup>。ヴェブレンの金銭上の大立て者は投機によって巨富を創りだしたのであって、企業を脅迫し、混乱を扇動することによって資産を安く買ったとき、自分たちが混乱させた市場が正常に戻った後で売り戻したにすぎなかったのである。

製造業が巨富の主たる源泉であるとのわれわれの主張は、ヴェブレンを歪めるものではなからう。彼の見解では、実際に製造業で富を創りだした人々は経済成長に関与した人々ではなかった。むしろ、自分が働いている企業の支配権を持たなかったにしても、新製品とそれを生産する手段を設計したエンジニアこそが称賛に値したのであった。ヴェブレンによれば、アメリカの経済的困難に対する真の解決法は価格システムを捨て去り、それをエンジニアによって運営される「テクノクラシー」に置き換えることであった。

主流派経済学者らは概して不平等の拡大に関心をもったものの、経済の適度な変化は支持してきた。イギリスの経済学者で、当時の第一人者アルフレッド・マーシャルはおそらく、多くは社会規範を変えることで解決できると信じて

<sup>27)</sup> Mark Twain and Charles D. Warner, *The Gilded Age: A Tale of To-day*, Hartford, Connecticut: American Pub. Co., 1873 [『金メッキ時代』上・下巻, 柿沼孝子訳, 彩流社, 2001年].

<sup>28)</sup> Henry George, *Progress and Poverty: An Inquiry into the Cause of Industrial Depressions and of Increase of Want with Increase of Wealth: The Remedy*, Garden City, NY: Doubleday, Page & Co., 1912 [1879] [『進歩と貧困』山崎義三郎訳, 日本経済評論社, 1991年].

<sup>29)</sup> Thorstein Veblen, "On the Nature of Capital: Investment, Intangible Assets, and the Pecuniary Magnate," *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 23, No. 1, November 1908, pp. 104-136.

いた。もし巨富が「経済的騎士道」を誇示するのに必要であると確信できるならば、社会の苦悩の多くは解放されるであろう<sup>30)</sup>。マーシャルの「経済的騎士道」の提唱は、今日のフィランソロピーの称賛とかなり共通している。新しい泥棒貴族を扱う方法は、かつて多くの泥棒貴族がしたことと同じこと——巨富の一部を寄付すること——を彼らがしているのだと納得することであろう。ちょうどカーネギーやロックフェラーが大金を基金に委譲したように、ビル・ゲイツやウォーレン・バフェットも同様のことをするよう促されたのである。

先行の研究者ワトキンスは、巨富の増大は主に大企業の成長の副産物であると見た。しかし、彼はまた、コミュニティ全体を特別に強化する富ではなかったと見なす活動にもある程度重点を置いている。ワトキンスによれば、大企業は大都市を創りだし、同じく大都市の発展は多くの巨富の源泉たる不動産投機を生み出した。その上、産業構造の急激な変化は投機が闊歩する移り気な株式・債券市場を生み出し、富を創り出した。投機は一定の状況下では繁栄を強化する、とワトキンスは理解した。投機は徐々に価格を平滑化するのである。しかし、投機的市場は当時の巨富の重要な源泉であったと彼は論じた<sup>31)</sup>。詰まるところ、富の不平等の拡大は「社会を構成する仲介者から直接的な注目を受けることになるだろう」と、ワトキンスは結論づけたのであった<sup>32)</sup>。

世紀交替期の間際で、金ぴか時代は革新主義時代と交替した。この変わり目は1901年のセオドア・ローズヴェルトの大統領就任で区切られるであろう。革新主義時代のアメリカは改革に

取りかかったものの、根本的な改革はしなかった。経済を作り変えている技術変化のプロセスを止めようとはしなかったのである。しかし、急激な技術変化による否定的な影響や不動産・金融市場のブームを改善しようとした。なるほど、度々みられるように各種の利益団体が所得税の導入に大いに関係していたはずだが、巨富は累進課税の導入によって攻撃されたのである<sup>33)</sup>。

さらに、多くのアメリカの経済学者が老齡年金の形態や、ドイツやイギリス、フランスで具体化した社会福祉を、そして一部の進歩的国家が限定的な基準で採用していた所得再分配を要求した。南北戦争の退役軍人年金は家計費のかなりの割合まで所得を供与し、一つのモデルを提供した。退役軍人年金は、アルコールやタバコ税など多様な内国税と輸入関税で賄われた。南部人らが繰り返し指摘したように、老齡年金の財源については効率性や公正性からは遥かにかけ離れていた。関税で痛めつけられた消費者は必ずしも富裕者ではなかったし、年金を受け取った退役軍人は必ずしも窮乏者ではなかった。しかし、スコッツボルトが明らかにしたように、退役軍人年金は近代的な社会保険形態の重要な先例であった<sup>34)</sup>。

## V. ボストンとシカゴ

富裕者の全国的傾向に関する理解は、相続が富の主要源泉で、長い歴史をもつ都市ボストンと、製造業がこの上なく重要な新興都市シカゴとの違いを詳細に検討することで深められる。

<sup>30)</sup> Alfred Marshall, "The Social Possibilities of Economic Chivalry," *Economic Journal*, Vol. 17, No. 65, March 1907.

<sup>31)</sup> Watkins, "The Growth of Large Fortunes," pp. 110-121.

<sup>32)</sup> Watkins, "The Growth of Large Fortunes," p. 170.

<sup>33)</sup> Bennett D Baack and Edward John Ray, "Special Interests and the Adoption of the Income Tax in the United States," *Journal of Economic History*, Vol. 45, No. 3, September 1985, pp. 607-625.

<sup>34)</sup> Theda Skocpol, *Protecting Soldiers and Mothers: The Political Origins of Social Policy in the United States*, Cambridge, MA: Belknap Press of Harvard University Press, 1992.

表7 ポストンの富豪分布の変化 (1892年・1902年)

産業分類	1892年	脱落者数	追加者数	1902年
不動産・レンタル・リース	42	-17	37	62
相続	38	-20	5	23
製造	37	-18	34	53
小売	35	-18	8	25
卸売	22	-17	1	6
金融・保険	13	-4	13	22
輸送・倉庫	10	-6	3	7
該当なし	4	-2	21	23
専門職・科学・技術	4	-1	1	4
情報	3	-2	2	3
宿泊・外食	3	-1	0	2
芸術・娯楽	2	-1	0	1
行政	1	0	1	2
公益事業	1	-1	2	2
建設	1	-1	0	0
投資家	0	0	75	75
企業経営	0	0	2	2
鉱業	0	0	1	1
健康・社会支援	0	0	1	1
合計	216	-109	207	314

出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 18-22, 137-138.

表7に示したように、1892年のボストンには216人の富豪がいた。不動産が富豪の一番重要な源泉で、相続はそのすぐ後に位置し、またそれに近接して製造業が続いた<sup>35)</sup>。ボストンの富豪は、飛び抜けて多様な集団であった。「この都市の最大の金持ち」はフレデリック・エイムズで、「巨富を相続してそれを増やした。すべて鉄道、不動産、電信線、投資で増やした」<sup>36)</sup>。富の一部は、自転車メーカーのアルバート・ポーブ大佐のように、技術革新で形成された。一方で、トーマス・ウィッグルワースの富は「父親の東インド貿易と商品販売に依っていた」。ハーバード大学のアレキサンダー・アガシー「教授」は「その富を、スペリオル湖のカルメット＝へ

<sup>35)</sup>このことは、例えば初期投資などのように、不動産や製造業における富の形成に相続が役に立たなかったことを意味するものではない。ただ、富の主要源泉として相続がトリビューンの特派員に強い印象を与えなかったからにすぎない。

<sup>36)</sup>Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 19-22.

クラ銅山で稼ぎだした」。マーチン・ブリマーは、「同名の父親から高額不動産を相続した。家族は何世代も裕福であった」——旧世代の不動産による富。チャールズ・ボーディッチの富は、「一部はJ. インガソル・ボーディッチから相続し、東インド貿易とベル電話で財を成した」——新旧の富の興味深い結合。ジョーダン・マーシュ社のエベン・ジョーダンは「大規模な織物業と投資」のお陰で富豪になった。

ボストンでは1902年に相続は第4位に転落し、大富豪全体のわずか10%を占めたにすぎない<sup>37)</sup>。不動産はなお富の源泉の第1位に着けているものの、製造業と小売業は相続を追い越している。生真面目な旧ボストン人の中でさえも、債券クーポンの切り抜きはマイナーリーグ・スポーツになっていた。

<sup>37)</sup>ここでは、単に「投資家」として表記された富豪を計算から省いている。

表 8 1892年におけるシカゴの富豪分布

産業分類	富の主要源泉		富の2次源泉	
	長者数	割合	長者数	割合
卸売	41	14.64	2	2.67
不動産	34	12.14	18	24.00
製造	33	11.79	2	2.67
小売	29	10.36	5	6.67
精肉	19	6.79	0	0
銀行	16	5.71	17	22.67
鉄道	16	5.71	6	8.00
木材	15	5.36	4	5.33
穀物	15	5.36	0	0
醸造・蒸留	13	4.64	0	0
出版	9	3.21	0	0
原材料	8	2.86	2	2.67
法律	8	2.86	0	0
建設	6	2.14	1	1.33
投機	5	1.79	16	21.33
農機具製造	5	1.79	0	0
その他	5	1.79	0	0
ホテル	2	0.71	2	2.67
薬品	1	0.36	0	0
合計	280	100%	75	100%

出所) Ratner, *Great American Fortunes*, pp. 19-22.

シカゴはボストンとは好対照をなすのであるが、シカゴもまた富の生産と増大における不動産と金融の重要性を示唆している。表8に示すように、1892年にシカゴは、まだ発展途上の都市であったにもかかわらず、ボストンを上回る280人の富豪を擁した<sup>38)</sup>。新興都市であることから予想されるように、シカゴでは相続は相対的に重要ではなかった。1892年の調査では、相続が理由で記載された富豪はわずか7人、全体の2.5%であった。1902年の調査では、相続は全体のわずか1%未満にすぎなくなっていた。

製造業が1892年の調査と1902年の調査の両方で、シカゴの富のもっとも重要な源泉であった。その上、これらの富の一部は新しい流れ作業技術の産物であった。精肉業は1892年までに19人の富豪を輩出した。上述のように、精肉業は、

流れ作業技術の採用がいかに大きく生産性を増大させたか、また垂直的統合についてのチャンドラーの典型的事例の一つであった<sup>39)</sup>。農機具も1892年に5人の富豪を輩出した。マコーミック収穫機会社がシカゴにあったことから、農機具はこの都市最大の富豪の部類に属した。マコーミックは規模の経済を極大化する垂直的統合を導入したパイオニアでもあった<sup>40)</sup>。その他の製造業も52人の富豪を輩出しているが、ここにもこの都市の急成長の結果であると認められる富がある。例えば、建設業、材木の供給、多様な卸売業、不動産などで、これらの産業は新しい技術から間接的に恩恵を受けたのである。精肉業者とマコーミック収穫機会社は労働者をシカゴに引き寄せ、それが今度は、商業や不動産、その関連産業で富を形成する機会を増大させた。

<sup>38)</sup>表8では、シカゴでいかに富の形成が行われたのかが理解しやすくなるよう、またトリビューンのリストの記載に賛意を表して、現代の産業分類を採用していない。

<sup>39)</sup>Chandler, Jr., *The Visible Hand*, pp. 391-402.

<sup>40)</sup>Chandler, Jr., *The Visible Hand*, pp. 305-306, 408-409.

確かに、シカゴはたとえ新技術が後押ししなくとも、中西部の成長し続ける農業生産の巨大な貨物集散地として機能するだけでも大きく成長したことであろう<sup>41)</sup>。しかしながら、この都市の巨富の創出に果たした技術の役割は明白である。

ある事業で出発し、その後、別の事業を拡大した企業家はシカゴでは多くの富を形成した。1892年の富の二次的源泉——時間的なものであって、必ずしも量的なものではない——には、不動産（18人の富豪）、銀行業（同17人）、そして主に商品先物や工業株、その他証券への投機（同16人）が含まれている。

先に、カール・サンドバーグの1916年の『シカゴ詩集』に言及した<sup>42)</sup>。その有名な詩の最初の1節はこうである。

世界のための豚屠殺者、  
機具製作者、小麦の積上げ手、  
鉄道の賭博師、全国の貨物取扱い人。  
がみがみ呶鳴る、ガラガラ声の、喧嘩早い  
でっかい肩の都市。

要するに、シカゴ経済の公正な描写なのである。

## VI. マクロ経済の枠組み

19世紀末における富の源泉についての以上の議論は、1870年から1900年までの時期、すなわち金ぴか時代に形成された、次のようないくつかの要因を示唆している。

(1) 一部の企業家は新しい技術、すなわちチャンドラーの流れ作業生産を利用して巨富を蓄積することが可能であった。もちろん、これらの企業家が地下の実験室から発明品を取り

出す技術の魔法使いにすぎなかったということではない。上述のように、新しい製造技術が生み出す利益の活用に成功するため、彼らはしばしばモラルや法律上の制約さえ打ち壊す、非常なまでの野心と意欲を抱いた。多くは、泥棒貴族の称号を受けるにまったくもって相応しかったのである。

(2) 強力な法的強制力をもつ所有権が、ハイリターン市場への投資を刺激した。ある者は、「ポストン一の金持ち」フレデリック・エイムズのようにポストンの土地に、またある者は、法律がその所有権を保護したことで知られるハーバード大学のアレクサンダー・アガシー「教授」のように、ミシガンの銅山に投資できた。訴訟や政治的操作はこの地の投資家を脅かしたであろうが、しかし、一般的に大規模な民間の住宅や鉱山や農地の開発は、金ぴか時代には比較的容易であった。外国からの資本流入もまたアメリカの富豪を増やすのに役立った。

(3) 金ぴか時代の税制は、巨富の成長には好ましいものであった。連邦レベルでは所得税もなかった<sup>43)</sup>。連邦所得税は南北戦争のときに徴税されたが、1872年に撤廃されてしまった。その後20年間、労働運動やポピュリストが新たに所得税を執拗に要求したが、保守派によって頓挫させられた。1894年にはうまく行ったが、翌1895年には最高裁が新所得税に違憲判決を下した。1909年になってようやく、所得税を可能にする憲法修正への十分な支持が議会で集まるようになり、1913年に初めて批准の手続きが完了することになる。したがって、金ぴか時代にはどれほどハイリターン投資で

<sup>41)</sup>William Cronon, *Nature's Metropolis: Chicago and the Great West*, New York: W. W. Norton, 1992.

<sup>42)</sup>Carl Sandburg, *Chicago Poems*, New York: H. Holt, 1916 [『シカゴ詩集』安藤一郎訳、岩波文庫、1957年、15頁]。

<sup>43)</sup>以下、Bennett D. Baack and Edward John Ray, "Special Interests and the Adoption of the Income Tax in the United States," *Journal of Economic History*, Vol. 45, No. 3, September, 1985, pp. 607-625を参照。

稼いだとしても、所得税に縛られることなく再投資できたのである。1898年には、一つは米西戦争に伴う歳入不足対策として連邦遺産税法が通過し、1899年から1907年までの間、遺産税が徴収された。しかし、この税の登場は金ぴか時代における富の蓄積に影響を及ぼすには遅すぎた。

低い税率が巨富の増加に及ぼす潜在的な影響力は見逃されることが多い。しかし、単純な事例が示すように、長きにわたりその効果は相当なものであった。9%の利率で投資した場合、金ぴか時代における証券市場の実質リターンは8年で2倍になった（表1）。もし所得に30%の税率が掛けられたとすれば、同額の投資が2倍になるのに12年かかったであろう。ある時点から出発し、富裕者は貧困者よりも大きな割合を貯蓄すると仮定できるならば、高率のリターンと低い税率は、富と所得の不平等をより急速に拡大する原因となるのである。

- (4) 農業から工業へのシフト、その結果としての都市化は、かなり以前から認識されてきたように、不平等の拡大を引き起こす潜在的な力であった。これはサイモン・クズネッツが、経済成長と所得の不平等に関する古典的論文で詳細に論じた要素の一つであった<sup>40</sup>。われわれの富豪リストでは、とりわけ都市化から富の不平等への直線的なチャンネルを見ることができ。すなわち、ボストンやシカゴ、その他アメリカの大小の都市でも、不動産から巨富が生みだされた。今日では、移民や郊

外化、経済活動の南部や西部へのシフトが富を獲得し増加させる機会を提供しているのである。

## VII. 結論

1892年と1902年に刊行された長者番付は、金ぴか時代の巨富の起源を照射するのに有益である。富の不平等の拡大は、はじめは工業化によってもたらされた。金ぴか時代の資本家富豪——批評家たちの言では「泥棒貴族」——の多くは、その最初の足場を新しい大量生産技術、すなわちチャンドラーの「流れ作業生産」で得た。泥棒貴族は新技術を考案したり、最初にそれを導入した人物であることは滅多になく、むしろコスト面で決定的な利点を手に入れるために新技術を採用した人物であった。

もう少し小ぶりの長者を調べるため、金ぴか時代のもっとも有名な長者から番付を下げると、製造業に加えて、商業や不動産や金融市場への投資で財を成した多くの長者たちを見つけることができる。その上、不動産や金融は当初、他のセクターで形成された富を拡大する何よりも重要な方法であった。振り返ってみれば、なるほどである。大富豪がハイリターンの投資手段を見つけることができるような経済は、不平等の拡大を経験しそうである。アメリカ人がかつては「モノ」を作ることで豊かになったが、近年は不動産や金融市場に投資することで裕福になったという議論は、真実というよりも神話である。金ぴか時代ですら長者への道はたくさんあったのである。

<sup>40</sup> Simon Kuznets, "Economic Growth and Income Inequality," *American Economic Review*, Vol. 45, No. 1, March 1955, pp. 12-18.